

## 立石寺舞楽に秘められた謎

天童郷土研究会会員 長瀬 一男

大阪市にある天台宗寺院四天王寺には古くから舞楽が伝承されており、聖徳太子の命日には精霊会舞楽が奉奏されている。不思議なことに、この四天王寺舞楽と根源を同じにする舞楽が、紅花の里として知られる河北町の林家に、門外不出の秘曲として一子相伝され、毎年九月に奉奏されている。一体何のために、四天王寺の舞楽が東北の地に伝えられたのか。

蘇我氏と物部氏の宗教戦争の時、勝者の蘇我馬子と聖徳太子らが、仏教迫害の報復として、敵地に造営した寺が、四天王寺である。四天王寺の四天王像は、邪鬼を踏みつけているが、蘇我氏は、反仏教徒の物部氏を踏みつけるように、血ぬられた物部氏の拠点に寺塔を造営したのである。四天王寺に伝わる舞楽は、怨霊の狂乱の舞に本質があり、霊の鎮魂のために舞われるという。そして林家舞楽も同じ意味を持っている。

林家舞楽は、天王寺楽家の一員であった林家の祖、林越前政照が、貞観二年（八六〇年）に、天台宗の東北の拠点、山寺立石寺を創建する際、慈覚大師円仁に随従し舞楽を伝えたという（林家文書）。円仁が二祖となった比叡山延暦寺は、平安京の鬼門を守る鎮護国家の道場として建てられた。山寺立石寺も、天台宗寺院として、延暦寺と同じ形式と意図をもって、怨敵降伏、鎮魂、国家鎮護のために建てられた。では、立石寺において、舞楽によって鎮めようとした怨霊は、一体だれの怨霊だったのか。

この霊は、きつと、朝廷軍と壮絶な戦いをくりかえし、結果的には文化もろとも打ち滅ぼされた古代東北地方の蝦夷たちの怨霊ではなかったのか、と私は思う。寺を建てて怨霊の魂を鎮め、異民を教化する最大の武器が仏教であり、その儀式が舞楽だったのではあるまいか。舞楽の納首利、陵王の面は、時空を超えて、凄まじい歴史の真実をわれわれに、語りかけている。

## スコープ

## 惚れるといふこと

高沢 マキ

「ほれる」と「ぼける」が、同じ漢字なのだ気づいたのは最近のことである。徒然草に、「走りていそがしく、ほれて忘れたる事、人皆かくのことし」と出てくるから、「本心を失うこと」と、「たまらなく好きになって、他の存在を忘れること」は、昔から紙一重だったことになる。

最近、「惚れる」ということばについて考えさせられる出来事があった。大阪に嫁いだひとに心を動かされたのである。

結婚するまで、彼女は月に一度くらいの割合で、大阪まで会いに出かけていた。相手の方がどうしてこちらへ来ないのか。女を通わせるといふのは、先の苦勞が見えていいるではないかと、まわりの者は思っていた。

余計なことはいえ、そのことにふれる者がいると、「わたしの方が惚れているの」と、かわした。信仰を通して知り合ったので、心が通い合っているのだとも言っていた。

やがて結婚し、里帰りをした二人と偶然出会う機会があつて、驚いた。いくら顔に出すまいと思つても、表情を変えていたのだと思う。ご主人の頭が、つるりと一本の髪の毛もなかったからである。

彼女は耳もとでこうささやいた。「うちのひと、子供の頃からかぶつていたかつらを、かぶらなくなつたの」。ご主人の方は、黙つてほほ笑んでいるだけだった。

別れて振り返ると、ゆっくりした足どり。足が不自由なのだということもわかつた。「惚れる」といふ、何という強くすがすがしい愛のかたち。二つのことばに同じ字をあてることの意味がわかつた気がしている。